

金福童さんケース調査報告

2000.2.23 現在

金 富子

以下は、2000年2月23日段階の調査報告である。21日にVAWW-NET Japanで調査会議をもち、金さんの件を検討した（内海、西野、池田、山口、林博史、松井など）。簡単にまとめると、金さんの行かされた地名があまりにもおおざっぱではあるが、

＜判明したのは＞

1. 金さんが行かされた地域でいえば、直接的には、広東・香港＝第23軍（支那派遣軍）、シンガポール・スマトラ＝第25軍（南方軍）、スマトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワ＝第7方面軍（南方軍）（第七方面軍のなかでも第16、25、29軍、なかでも第25軍）がかかわっている。

2. 当然、これらはアジア太平洋戦争・南方作戦の展開と関わっている。天皇-大本营-南方軍

3. 敗戦時の処遇には、第七方面軍司令部、第10陸軍病院、米軍収容所がかかわっている。

＜疑問点＞日本軍のどのレベルの責任を問うのか？←上海シンポのときに話し合う必要がある。

以下の報告をふまえて、次の項目についての再調査をお願いしたい。

1. 金さんがつれていかれた広東、香港、シンガポール、スマトラ、ジャワ、インドネシア、マレーシアのうち、具体的な地名、時期、人物名、陸軍か海軍かで覚えているところを調べてほしい。とくに、シンガポールのあとに行った「スマトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワ」の部分はあいまいなので、行った時期、地名等で思い出せたところを詳しく聞いてほしい（スマトラ、ジャワはインドネシアの一部です）。内海さんによれば、①第25軍が管轄していたスマトラには、朝鮮人軍属がたくさんいたので、証言が集まる可能性がある、②また金さんに聞くときに実際の地名を口に出しながら聞くと思い出しやすい、ということです。

西野さんは広東が、内海さんはインドネシアが、林・中原さんはマレーシア・シンガポールについて詳しいので、地名・時期ができれば調査が可能です。

2. 敗戦時にシンガポールにいたということだが、いつから、どのような経緯でシンガポールに行ったのか。シンガポールの慰安所のあった地名や軍隊（陸軍か海軍か）を聞いてほしい。

3. 軍属だったヒョンブの創氏改名の名前、出身地などがわかれば、名簿が見つかる可能性がある（先日、防衛庁図書館で名簿を見つけました）。米軍キャンプの地名なども聞いてほしい。

また、その他の＜疑問＞、＜課題＞は下記の文中に、記した。

以上の結果を文章にして、FAXしてくれれば、上海シンポの時まで調べます。

1. 個別の被害事実

1) 金福童さんの証言（by『証言集Ⅱ』）

◆1926年慶尚北道梁山生まれ。6人姉妹4女。

自小作？父死亡後没落。普通学校？に4年まで通学。

◆1941年15歳「春か秋」に区長・班長が「階級章のない黄色っぽい服の日本人」（韓国語堪能）、母に「テイシнтаイに娘を送るので出なさい」「テイシнтаイとは軍服をつくる工場に行き働くこと。3年だけ」書類に印を押すのを強要。

◆バスで釜山→船で日本下関→貨物船で台湾→広東で「慰安婦」にされる
→香港に三ヶ月→「軍人たちの後に従って」シンガポールへ。山深いところにある軍部隊へも出張。数ヶ月いて→船やトラックで「スマトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワ」へ移動。

*慰安所名は「コア倶楽部」。管理人ハ、日本で育った四〇代の韓国人。

「ニイサン（兄さん）」と呼ぶ。慰安所では日本語

*源氏名は「カネムラ・フユコ」「ヨシコ」

*敗戦＝解放時はシンガポール。「第10陸軍病院」看護訓練。

ヒョンブ（従姉の夫？）と会い米軍収容所へ→最後の帰国船で帰国。

2) 被害の時期・場所・様態

1941 年春か秋頃、台湾を経て広東に行きそこで「慰安婦」とされたあと、香港の慰安所にかされ、3ヶ月後にシンガポール、その後インドネシア、ジャワ等に行かされシンガポールで敗戦＝解放を向かえたという金福童証言の主な部分は、日本軍による広東攻略作戦、アジア太平洋戦争勃発と同時に展開された香港作戦、マレー・シンガポール作戦、蘭印作戦や南方軍政の展開と符号していると思われる。

①広東の慰安所

これらの作戦を順にみていくと、金さんは、1938 年末の広東攻略作戦後に広東付近に警備体制をひいた第 21 軍（波集団）によって開設された慰安所に、1941 年後半頃に入れられた可能性が高い（その頃は第 23 軍に編成されていた）。

広東に慰安所が設置された経緯をみてみよう。大本営は、南京陥落（1937 年 12 月）後も膠着状態が続いた日中戦争を打開するため 1938 年末に武漢攻略作戦を発動したが、この作戦と平行して実施されたのが広東攻略作戦であった（9 月初の大本営御前会議により決定）。この作戦のために、1938 年 9 月 19 日、第 21 軍が編成された。司令官には古荘幹郎（ふるしょうもと）中将（台湾軍司令官）が任命された。第 5・第 18・第 104 師団の 3 師団からなる第 21 軍は、海軍第七艦隊と協力し、広東付近要地への作戦を開始した。10 月 12 日ほとんど抵抗をうけることなくパイアス湾に上陸した第 18（久納誠一師団長）・104 師団（三宅俊雄師団長）は広東に突進し、10 月 21 日に第 18 師団（安藤利彦師団長→11 月 9 日以降は今井均）が広東を占領した。第 5 師団も 22 日広東南方の虎門付近に上陸した。

広東占領後、第 21 軍の各部隊は広東付近に集まり、警備体制にうつった。広東地域に慰安所が置かれたのは翌 1939 年 4 月段階までに設置されていたことは、第 21 軍司令部「戦時旬報（後方関係）1939 年 4 月 11-20 日」[吉見 1992: 214-216] によって確認できる。

■＜資料①：公文書＞＝＜広東での慰安所開設を示す公文書＞

第 21 軍司令部「戦時旬報（後方関係）1939 年 4 月 11-20 日」[吉見 1992: 214-216]

「(六) 其他 二. 慰安所ノ状況 1. 慰安所ハ所轄警備隊長及憲兵隊監督ノ下ニ警備地区内將校以下ノ為開業セリ、2. 略 3. 現在従業婦女ノ数ハ概ネ千名内外ニシテ軍ニ於テ統制セルモノ約八五〇名各部隊郷土ヨリ呼ビタルモノ約一五〇名ト推定ス 右ノ他第一線ニ於テ慰安所ノ設置困難ナルモノニシテ現地ノモノヲ使用セルモノ若干アリ 4. 慰安所ノ配当及衛生状態概況別紙ノ如シ」

別紙

慰安所ノ配当及衛生状況一覧表			
区分	場所	〔慰安婦〕 人員数	〔性病〕 罹病率 (百分率)
軍直部隊	市内	159	28%
久納兵団	広東市西部	223	1%
浜本兵団	広東市東部	129	10%
兵站部隊	江南	122	4%
仏山支隊	仏山	41	2%
飯田支隊	海口	180	
合計		850 (ママ) → 854	

備考 右ハ憲兵駐屯地ノミノモノヲ計上ス 右以外三水、九江、官？、増城、石流等二モ設置サレアルモ極メテ少数ニシテ詳細不明ナリ

注：() は、引用者による補足。

→軍直部隊（市内）←調査必要

久納兵団（広東市西部）＝18D 久納誠一中将（38.7.15-40.2.10）

浜本兵団（広東市東部）＝104D 浜本喜三郎中将（38.11.17-40.12.2）

兵站部隊（江南）←調査必要

仏山支隊（仏山）←調査必要

飯田支隊（海口）←調査必要

←38D 編成前の状況であることに注意。

この公文書によれば、「慰安所ハ所轄警備隊長及憲兵隊監督ノ下ニ警備地区内將校以下ノ為開業」しており、その慰安所の「従業婦女ノ数」即ち「慰安婦」の人数は「概ネ千名内外」であり、そのうち「軍ニ於テ統制セルモノ約八五〇名」「各部隊郷土ヨリ呼ビタルモノ約一五〇名」と、第 21 軍司令部では把握していた。同資料には「近來各種慰安設備（食堂、カフェ、料理屋其他）ノ増加ト共ニ軍慰安所ハ逐次衰微ノ徴アリ」という記述もあることから、この旬報がかかれた 1939 年 4 月以前にはもっと慰安所数が多かったのであろう。また、4 万～5 万人の兵力をもつ「吉見 1992: 53」第 21 軍に、約千人の「慰安婦」が配置されていたことも判明している。

同時期に行われた武漢攻略作戦では、漢口陥落の 1 ヶ月後に慰安所を開設している。漢口陥落が切迫すると「南京事件再発防止」に苦慮[長沢 39]した中支那派遣軍は、漢口占領の翌日である 10 月 27 日には、はやくも第 11 軍の村中先遣参謀が「発生を予想される暴行事件に対する防波堤」として、慰安所設置の準備を指示[長沢 43]されており、漢口占領のほぼ一ヶ月後の 11 月 25 日には実際に慰安所が開業されたのである（第二軍司令部「第二軍状況概要」(1938 年 12 月 10 日)[吉見 1992: 212-213]。このような経緯や、上記第 21 軍の公文書が示すように、広東攻略作戦においても、「南京事件再発防止」のため、広東占領直後から慰安所設置がなされたと思われる。

上記 21 軍の公文書別紙（「慰安所の配当及衛生状態概況」）から、各部隊への慰安婦数の配当と性病罹患率がわかる。ここで、広東市西部の久納兵団とは、久納誠一中将（38.7.15-40.2.10）を師団長とする第 18 師団、広東市東部の浜本兵団とは、浜本喜三郎中将（38.11.17-40.12.2）を師団長とする第 104 師団を指す。軍直轄隊を含めて、広東市在住の慰安婦数は全体の 60%内外を占めていた。それ以外にも「右ノ他第一線ニ於テ慰安所ノ設置困難」なときには「現地ノモノヲ使用セルモノ若干アリ」という記述から、「慰安所の設置困難」な危険地域では占領地の女性を慰安婦にしていたことが伺える。このように金さんが広東にくる 2 年以上前から、慰安所が広東市を中心に、広範囲に設置されていたのである。（1940 年 2 月 9 日、第 21 軍→新たに南支那方面軍及び第 22 軍＜安藤利吉司令官＞＝支那派遣軍戦闘序列へ。同年 7 月 23 日、南支那派遣軍は、支那派遣軍をはなれて、大本営直轄へ）

■西野瑠美子『従軍慰安婦と十五年戦争』に広東慰安所についての証言と写真多数

＜証言①＞第 18 師団の砲兵部隊の軍曹・野村武（1993 年当時、福岡県在住）＝「ここ（淡水の慰安所）には土庫で囲ってある刑務所があり、そこを慰安所にしてましたよ。『広東ビー』や『朝鮮ビー』が大勢いましたね。50 人はいたんじゃないでしょうか。…外出のときには外出許可書とコンドームが渡されるんです。…」[西野 1993: 52-54]

＜証言②＞野戦重砲兵だった小田清は、1939 年 4 月軍直部隊＝軍直轄部隊に入った時点ですでに広東地域には多数の慰安所が設置されていた。民家の建物を接収して慰安所にしたたものが多く、なかには、二階建ての「役所の建物」を慰安所になっているものもあった。「その慰安所には 3 人ぐらいの朝鮮人のおやじさんがそれぞれ 50 人ぐらいの朝鮮人慰安婦を管理していましたよ。そこだけで、百人から百五十人の慰安婦がいたんじゃないですか。料金は兵隊は一時間二円ぐらいだったと思います。下士官は 3 円、将校は 5 円ぐらいだったか。とにかく階級が上になるほど料金も高くなるんです。私が覚えている慰安所は、ベニア居たようなもので部屋を仕切ってあり、そこに一人ずつ慰安婦がいました。ほとんどが『朝鮮ビー』でした。ほかに、『台湾クーニャン』や『広東ビー』の慰安所もありました。あるとき、馴染みになった慰安婦に、どうしてこんなところに来たのか聞いたんですよ。その『朝鮮ビー』は、准看護婦の募集があり、そこに応募してきたのに慰安所に入れられたと言っていました。騙されたんですね。ほとんどの女が 18 歳から 24 歳ぐらいの若い娘でした。…『新町慰安所』『東山慰安所』『白雲慰安所』『河南慰安所』…まだまだたくさんありましたよ」[西野 1993: 55-57]

＜証言写真＞ 第 23 兵站自動車連隊に所属した石川徳次による河南の慰安所（＝兵站部隊への

割り当て)の写真＝「慰安所の順番をまつ兵士たち」「慰安所の心得」[西野 1993:57-58]
 <証言③>歩兵第 70 連隊の香川弘三＝駐屯する部隊が行く慰安所は、広東市内にある小学校を改造した慰安所。校門あたりに今で言う宝くじ売場のような小さなボックスがあり、朝鮮人の男がハーモニカをふきながら机の上に座っていた。…」[西野 1993:59-62]

1941 年 6 月 25 日 第 38 師団長交代(藤井洋治→佐野忠義中将へ)
 1941 年 7 月 5 日、南支那方面軍の戦闘序列を解き、第 23 軍にその任務を継承するとともに、第 25 軍を編成し、南部仏印に進駐。
 1941 年 8 月 12 日、第 23 軍は支那派遣軍隷下へ。
 1941 年、広東についた金さんたち 20 人は、「幌の破れた軍のトラックに乗って」「衛生病院らしきところへ行き」そこで連れてこられた全員が軍医による性病検査を受けた後、かなり歩いて「鉄道がそば」にある慰安所に連れて行かれ、昼間検査したその軍医によって強姦され、自殺をはかったが、結局「慰安婦」にされたという。慰安所には彼女が到着前にすでに 10 人の女性があり、金さんたち 20 人加えて 30 人が一緒になったが、中国人女性一人以外はすべて朝鮮人女性であったという。慰安所の建物の真ん中には廊下があり、その両側に部屋が並び、各部屋には番号と慰安婦の名前が貼ってあった(30 部屋)。また、外には出れず、外出のときは軍人の監視付きだったという。彼女の証言によれば、慰安所に入れるのは日本の軍人だけだったこと、慰安所利用の際には入り口で票・サックをわたされたこと(管理人は釜山から彼女たちを引率してきた朝鮮人)、慰安所利用において階級別に時間割り当てがあったこと(平日昼 12 時から午後 5 時、日曜は朝八時～午後五時まで兵士、夜七時～将校、宿泊あり)、週一回ずつ軍医による定期的な性病検査があったこと等の証言から、中国各地で制度化されていた軍専用・民間運用の慰安所だったと思われる。そして、金さんが連れて行かれた 1941 年後半頃に広東付近を警備していたのは、支那派遣軍(総司令官:畑俊六対象)下の第 23 軍(司令官:今村均中将、41.6.28-11.6 →司令官:酒井隆(41.11.6-43.3.1) 中将)であった。

<資料②: 在広東総領事館関係>＝外務省外交資料館所蔵『支那事変二箇シ邦人ノ渡支制限並取締関係 暫定処理要綱 渡支邦人暫定処理二箇スル統計報告』[吉見 1992:53-54]

年月	職業別	広東	海口	香港	計
1941・4	軍酒保慰安所	21	2	0	23
1941・5	軍酒保慰安所	17	2	0	19
1941・6	軍酒保慰安所	7	0	0	7
1941・7	軍酒保慰安所	5	1	0	6
1941・8	軍酒保慰安所	6	1	0	7
1941・11	軍酒保慰安所	12	0	0	12
1942・3	軍酒保慰安所	8	1	14	23
1942・4	軍酒保慰安所	3	0	3	6
1942・6	軍酒保慰安所	7	1	5	13

このほかに、廈門・海口・汕頭の領事館関係の資料もある。

以上の中国入国者職業別・行先別表によれば、1941 年 4 月から翌 42 年 6 月まで、広東では「軍酒保慰安所」関係として少なくとも 86 名が領事館に把握されていたことがわかる。

なお、その時の第 23 軍の警備状況は以下を参照。

<1941 年・秋 第 23 軍の状況> ←地図あり

司令官: 今村均中将

主力 3 個師団(第 18・38・104 師団)＝広東周辺地区

独混 19 旅団＝汕頭付近

第一独立歩兵隊＝汕尾付近

北島支隊＝「英支」国境付近

第 48 師団の一部＝北部海南島 ([香港・長沙作戦:50-51])

1941 年 9 月～中央より第 23 軍に「香港作戦」の研究指示

→9 月 14 日 今村司令官、第 38 師団長(佐野師団長)に部隊編成を指示

1941 年 10 月 軍首脳部の人事異動

1941 年 11 月 6 日 南方軍の戦闘序列が令せられた日に

第 23 軍の今村司令官→第 16 軍司令官へ。かわって

留守近衛師団長の佐野隆中将→第 23 軍司令官へ(11 月 15 日に広東に着任)

1941 年 8 月 9 日、大本営陸軍部は、南方に対して、11 月末を目標に、対英米作戦準備を促進することを目標にする「帝国陸軍作戦要綱」を決定し、具体的な準備にとりかかった。金さんが広東で「慰安婦」にされたあと、香港、さらにシンガポール、スマトラ等の慰安所に行かされたのは、1941 年 12 月 8 日の日本の対英米蘭戦争と深く関わっている。広東攻略作戦に関わり、広東周辺に慰安所が開設されたのは第 21 軍指揮下の第 5・18・104 師団、金さんが広東に行かされた 1941 年後半に広東周辺を警備していたのが第 23 軍指揮下の第 18・38・104 師団である。これらの師団のうち、第 5、第 18、第 38 師団はアジア太平洋戦争勃発とともに開始された南方作戦にそれぞれ投入され、金福童さんのその後の運命と関わっていくのである。広東攻略作戦ののち山東省警備・治安戦、(ノモンハン)、南支那作戦、北部仏印進駐と各地の激戦地を転戦した第 5 師団は、11 月 15 日に第 25 軍戦闘序列に編入し、マレー・シンガポール作戦に加わることになる。広東付近の警備していた第 18 師団は、40 年末ごろから南方作戦準備のための主として上陸訓練をし、41 年 11 月 6 日の大陸命により 11 月 15 日以降は第 25 軍戦闘序列にはいり、マレー・シンガポール作戦に加わることとなる「マレー進攻作戦:431」。第 38 師団は、第 23 軍による香港攻略作戦の主力部隊となった後、1942 年 1 月 14 日以降は第 16 軍隷下にはいり、インドネシアを戦場とする蘭印作戦を展開することとなるのである。

②アジア太平洋戦争時の南方作戦と「慰安婦」政策

■アジア太平洋戦争/初期作戦のための日本軍の部署(陸軍)

<南方軍>司令官: 寺内寿一大将

第 14 軍(本間雅春中将): フィリピン攻略作戦・・・16D,48D,65B、ほか

第 15 軍(飯田祥二郎中将): 泰国安定、ビルマ作戦準備 33D,55D 主力基幹

第 16 軍(今村均中将): 蘭印作戦(除北スマトラ)・・・2D,56B

第 25 軍(山下奉文中将): シンガポール、北スマトラ攻略…近衛師団、5D、18D 主力、56D

川口支隊(川口清健少将): 英領ボルネオ要地攻略・・・35B 基幹

第 3 飛行集団(菅原道大中将): マレー方面航空作戦

第 5 飛行集団(小畑英良中将): フィリピン方面航空作戦

南海支隊(堀井富太郎少将): グアム攻略

支那派遣軍第 23 軍の一部: 香港攻略

大本営予備: 第 4 師団

(BY『日本の戦争 図解とデータ』28)

■ところで、この対英米蘭戦争を前に、陸軍省はみずから軍慰安所の設置に乗り出していたことが明らかになっている[吉見義明・林博史 1995:22-24]。

<公文書>金原節三陸軍省医務局医事課長の業務日誌には、オランダ領東インド(インドネシア)をひそかに視察した軍医少佐が、強姦防止と性病蔓延防止のためのため慰安所をインドネシア占領後に設置し、村長に割り当てて「慰安婦」を徴集することを、陸軍省に提言していた。そして実際、アジア太平洋戦争直後に日本軍が東南アジアに次々と占領地をひろげていた最中の 42 年 1 月には、「南方方面占領地ニ於テ軍側ノ要求ニ依リ慰安所開設」が求められるようになったのである[吉見 1993:142-]。これに対し、42 年 1 月には東郷茂徳外務大臣が業者・慰安婦の渡航を、旅券でなく、軍の証明書で行うように指示していたことから、この時期から軍の証明書

がなければ少なくとも東南アジア・太平洋地域には絶対行けなくなったことも明らかになっている。即ち、アジア太平洋戦争勃発後の慰安婦政策は、「軍管理の性格がいつそう強くなった」[同上:22]のである。また、陸軍中央は、南方軍(司令官:シンガポール)に対して、1942年1年間に645万個の「衛生サック」が送付されていた。また、現地であるシンガポールでも生産されていた[林:1993]。また、このような南方作戦に投入された師団の多くは?、中国で慰安所を経験していた軍隊であったから、当然のように慰安所を求めたのであろう。

金さんが広東をへて、香港、さらに東南アジアの慰安所に行かされたのは、このような背景があったと思われる。

<疑問>植民地下の朝鮮で、金さんが1941年に「テイシンタイに娘を送るので出さない」と脅迫されたのは、このような南方作戦準備に関連して慰安所設置計画への供給ということは考えられないか? = 「性の兵站基地」(西野)、土金富之助証言(後述)。

③第23軍と香港の慰安所 ←香港

1941年10月5日、杉山元参謀総長、対米英蘭戦争に伴う帝国陸軍作戦計画と作戦準備上奏→裁可

翌10月6日、香港攻略作戦に関する大命(大陸命第557号)。

1941年12月8日アジア太平洋戦争が勃発した。と同時に、第23軍(司令官:酒井隆中将)隷下の第38師団(師団長:佐野忠義中将)を主力に香港攻略作戦が行われ、香港は12月25日に占領された。翌26日、第23軍は、第38師団に「香港島全島ヲ占領シ重要施設及物資ノ確保」を命じ、第38師団はこの日英軍を武装解除され、香港島を5個地区に区分して市中警備をはじめた(27日には作戦部隊の編組をつく)。海軍艦隊も香港の港に進駐した。28日に入城式を終えたあと、翌29日には、第23軍の佐野司令官は、軍戦闘司令所を閉鎖して軍政庁を発足し、軍政がはじまった(司令官は空路広東に帰還)。そして、1942年1月19日に香港占領地総督部が編成され、総督には磯谷廉介中将が、参謀長には有末次大佐が着任した。香港防衛隊(長:足立重郎少佐、独歩67、68、69及び香港砲兵隊)が警備に当たった。

香港攻略作戦の主力だった第38師団に、突如として、第23軍司令官より「南方離島作戦」のための編成命令が下ったのは1941年12月30日であった。1942年1月4日には、第38師団は第16軍戦闘序列に入れられ、12日に東方支隊が、18日には師団主力が、30日には東海林支隊が、相次いで香港を出兵し、蘭印作戦に投入されたのである。したがって、第38師団が香港にいたのは、1ヶ月にも満たないことになる。

金さんによれば、「(金さんのいた広東の慰安所に)ある日軍人たちがトラックを持ってきて、何の説明もなしに荷をまとめるよう」に言われ、着いたところが香港の「個人の広い屋敷を取り上げて合板で間仕切りをしてこしらえた」慰安所の建物であったと証言しているが、それは、香港占領後に開設された慰安所であったであろう。

<公文書>慰安所が開設されていたことは、前記<資料②>で、1941年に0名だった「軍酒保慰安所」関係が、1942年3月には突然14名になっていることから証明できる。

<疑問>←その軍隊が、第38師団なのか、香港防衛隊なのか。

④第25軍とシンガポールの慰安所

■金さんによれば、「香港に三ヶ月いて、また移動することになり」シンガポールに行ったが、「軍人たちの後に従ったよう」だったと証言している。これは同じ第23軍下で広東を警備しマレー・シンガポール作戦に投入された第18師団(長:牟田口廉也)の可能性が?。第18師団は、アジア太平洋戦争勃発直前の41年11月6日大陸命により、11月15日以降第25軍(司令官:山下奉文大将)戦闘序列に入り、12月8日とともに始まったマレー作戦、シンガポール作戦に加わったのである。第25軍が、シンガポールを占領したのは42年2月15日であった。その直後シンガポールでは、華僑数万人を虐殺するとともに、第25軍隷下の各部隊がマレー半島全域に展開して、42年3月までの一ヶ月間各地で華僑の肅正を行った(詳しくは[林博史 1992]参照)のだが、その最中あるいは終了直後に、シンガポール・マレー半島に慰安所が続々と開設されることになる(=後述)。

■シンガポール占領後の2月21日、第25軍の軍命令=治安肅正と指揮下の各師団の地域分担は、①シンガポール警備隊(隊長:第5師団の川村参郎少将)シンガポール市の警備

②近衛師団(西村琢磨中将)は市内を除くシンガポール島の治安任務

③第18師団(牟田口廉也中将)はジョホール州に移動、同州の治安警備

④第5師団はジョホール州を除くマレー半島

となっている[マレー進攻作戦:631][林 1992:59]

金さんが行かれたシンガポールの慰安所は、「細長くたてられた家に間仕切り布を垂らしただけ」であったが、「軍部隊からは少し離れていて、民家からは遠く離れた場所」にあって「三階建て洋館を四軒、鉄格子で窓をふさぎ、入り口には歩哨が見張って」おり、「遠くの大砲の音がよく聞こえた」という環境であった。

■林博史氏の研究により、シンガポール及びマレー半島の慰安所について、以下のことが明らかになっている[1993]。まず、シンガポールについて[林 1994]は、占領後のわずか12日後である2月27日には慰安所が開設され(当時、近衛師団通信対無線第二小隊隊長山孝雄 1983:150-151←この慰安所開設の際に、軍司令部が慰安婦募集を行ったこと、現地出身の「慰安婦」に「手足を寝台に縛り付け」てまで、大勢の兵士に「慰安」を強要させていたことも併せてわかっている)、日本軍関係者あるいは地元の住民・関係者の回想記や証言によってブクム島、セントーサ島、ケーンヒル、タンジョン・カトン、プキット・パソー、セレーター軍港の6箇所[1993]付け加えて、ブッキマ(林氏からのご教示による)、合計7箇所に慰安所があったことが判明している。このうち、ケーンヒル・ロード、セントーサ、セレーター軍港の慰安所に朝鮮人女性がいたという証言がある。

ケーンヒルについては、<証言>「町はずれのケーンヒルは、市民の近寄らない処だった。われわれはそこを『トタン塀』と呼んでいた。トタン塀で区切られた敷地には、ニッパ椰子のみずばらしい樓閣が立ち並んでいた。・・・拳銃をもった憲兵が突っ立っていた。・・・娼妓は朝鮮人が多かったが、マレー人もいた」(独立自動車第42大隊・松井正武証言『戦鬼—シンガポール・パラオ島防衛戦』東宣出版、1973:112)←公文書[吉見 1992:350-354]や別の証言あり(昭南特別市幹部・篠崎譲証言「朝鮮から連れてきた親方と、台湾人であった日本名山口君子という女性に経営させた」)。

次に、セントーサの慰安所には、1942年11月に朝鮮人慰安婦12~13人が送られてきて慰安所が開設された(<証言>この駐屯していた陸軍空港の燃料補給廠に通訳として勤務していた永瀬隆氏によれば、その慰安婦たちはシンガポールのレストラン・ガールということで百円の支度金をもらって来てみたら慰安婦にされたと言きながら訴えたという=林氏のヒヤリング)。

さらに、セレーター軍港は、シンガポールの北東部にあり、「南方最大の海軍基地」であったが、大規模な海軍用慰安所があり、慰安婦は「朝鮮人、中国人がほとんどだった」(1944年1月~巡洋艦「利根」の機関兵だった佐藤隆一(日朝教会埼玉連合会『証言「朝鮮人従軍慰安婦」第2集』)。

また、シンガポールの対岸にあるジョホール・バルの慰安所にも、朝鮮人「慰安婦」がいたことが判明している。<証言>この慰安所の開設に携わった近衛歩兵第5連隊の下崎吉三郎によれば、1942年4月か5月頃に開設された慰安所には「南支の広東に居た」日本人や朝鮮人女性が来たという(『南方での思い出』1991年、169-173)。金さんのように、広東からマレー半島に「慰安婦」が連れてこられていた例が実際にあったのである。

<課題>金さんが行かれたシンガポールの慰安所が具体的な地名は?

⑤第25軍とマレー半島の慰安所

また、シンガポールの慰安所にいた時に、金さんは「時々、山深いところにある軍部隊まで」「軍人たちが護衛して」「梶をおろしたままのトラックにのって」「一週間」ぐらい「出張」と証言している。テント一つで持ち運びの慰安所をつくり、「テント野中を合板で間仕切りして、3-4人入れる」ようにした。「慰安所の責任者はその部隊に別」にいた」という(どういう意味か?)。軍のトラックで行った「山深いところ」とは、マレー半島各地で作戦を展開中の部隊で

あったと考えられる。

■シンガポール以外のマレー半島の慰安所はどうだったのでしょうか。林氏によれば [1993]、は、1942 年 1 月 2 日には、マレー半島上陸地点シンゴラにいた兵站の将校以下 3 名が「慰安婦集め」を任務にバンコク出張を命ぜられ、タイ人女性 3 人を連れ帰り、2 月はじめにはハジャイとしんごら（いづれもタイ領）に慰安所を開設したが、林氏はこれがマレー半島で最もはやい慰安所の一つではないかと推測している。

マレー半島で、文献や証言によって慰安所があったとされている町は、「ケダ州アロースター、パリン、ベナン島、ペラ州タイピン、イポー、ケランタン州コタバル、パハン州クアラリビス、クアンタン、セランゴール州クアラランブール、ネグリセンビラン州セレンバン、クアラピア、ポートディクソン、ゲマス、マラッカ州セガマト、クルアン、ムア、パトババ、ジョホールバル、シンガポール」[林 1993a]、さらに「クアラトレンガヌ、クアラカンサー、テロックアンソン」[林 1993b] が明らかになっており、「各州の主要な都市には、日本軍が駐留し、慰安所も設けられていた」[林 1993a: 278-279] ことが指摘されている。また、兵士の証言からは、シンガポールを除いて、マレー半島では中国人の慰安婦が圧倒的に多いという [林 1993b: 87]。しかし、これ以外にも金さんの証言のように、部隊の求めに応じて臨時の出張慰安所が設置されたのであろう。

■ [林 1993b: 84] マレー半島の慰安所の地図あり

⑥蘭印作戦と第 25 軍管轄下のスマトラ等の慰安所

■金さんが「シンガポールで数ヶ月暮らし」その後行かれたのが「スマトラ、インドネシア、マレーシア、ジャワ」だった。このときのスマトラ等の状況は、どうだったのか。

マレー作戦終了後、第 25 軍は南方軍からマレー半島の安定確保と中・北部スマトラ等の要域占領の任務を課され、3 月 12 日同軍近衛師団は中・北部スマトラ作戦を実施し、一週間で主要地域の占領した。一方、南部スマトラは 2 月中旬には、第 38 師団（ ）主力によって占領確保されていた。香港攻略作戦の主力部隊であった第 38 師団は、香港作戦終了後の 1942 年 1 月 14 日に蘭印作戦を遂行するために第 16 軍（司令官：今村均）に加わっていたのである。3 月 9 日、南方軍はスマトラ全域を第 25 軍の作戦地域としたことにより、3 月 12 日から第 38 師団等の第 16 軍部隊は第 25 軍の指揮下にはいった [南方方面陸軍作戦: 6]。 (第 25 軍のうち、マレー半島のジョホール州の警備を行っていた第 18 軍主力は、スマトラ作戦終了後に同州警備を近衛歩兵第五連隊に移譲して、ビルマ作戦に参加するために 4 月 2 日シンガポール港から海路ラングーンに向かっている)。

1942 年 5 月頃の第 25 軍主要部隊の配置としては、第 25 軍司令部がシンガポールに位置し、マレー半島を第 5 師団が、中・北部スマトラを近衛師団が、南部スマトラを第 38 師団がそれぞれ警備したのである。即ち、マレー・スマトラ地域の警備にあたったのは第 25 軍だったわけである。したがって、金さんが「シンガポールに数ヶ月暮らし」その後スマトラに行かれたのは、以上のような蘭印作戦の展開とその後マレー・スマトラを管轄地域とするようになった第 25 軍の部隊配置が密接に関連していると思われる。

■<資料③：公文書>その第 25 軍（富集団）司令部が 1942 年 8 月 25 附けで出した『第 25 軍情報記録（第 68 号）自 7 月 11 日 至 7 月末日』には、憲兵隊による調査「最近に於ける在留邦人状況の概要」（7 月 20 日現在）が含まれている [吉見 1992: 357-359]。憲兵隊が調べた 1942 年 7 月 20 日現在の「在留邦人の状況」は、マレー半島・スマトラの在留邦人（軍属を除く）総数 734 人、性別では男 396 名（戦前よりの在住者 67 名）、女 341 名（同 110 名）であった。うち最も多い居住地がシンガポール 283 人、次いでジョホール州 127 人である。「渡来府県別」では「朝鮮ノ 196 名、長崎県 59 名、台湾 49 名の順序」が記されていることから、当時の「在留邦人」の 4 人に一人が、朝鮮人だったのである。その性別は明らかではないが、この調査は軍属を除いた数であり、また職業別では「慰安婦ノ 194 名ヲ最高トス」との記述があることから、朝鮮人のうち相当数が朝鮮人女性であり、しかも慰安婦であったと推測されるのである。←金さんもこの中にいた？

■<重要証言>スマトラのパレンバンで憲兵として慰安所に関わった土金富之助『シンガポール

への道』「巡回で出入りしているうちに、私は K 子と Y 子という朝鮮の女性（この建物は全部朝鮮出身）とよく話をするようになった。・・・「私達は、朝鮮で従軍看護婦、女子挺身隊、女子勤労奉仕隊という名目で狩り出されたのです。だから真逆慰安婦になんかさせられるとは、誰も思っていなかった・・・」。

<課題>スマトラのあとに行った「インドネシア、マレーシア、ジャワ」について、具体的な地名、時期、覚えている人名などの調査必要。

⑦南方軍政と慰安所

1942 年 7 月以降は、南方軍政の展開や戦局が「慰安婦」政策に関わってくる。ここで南方軍政についてみてみよう。南方占領地の支配方針は、戦争直前の 1941 年 11 月 20 日、大本営政府連絡会議決定の「南方占領行政実施要領」によって定められた。これによると、占領後にさしあたり軍政を行うが、その目的は①治安の回復、②重要資源の急速獲得③作戦軍の自活確保の三点にあるとされた。その主眼は、戦争遂行に必要な石油をはじめとする「重要資源の確保」にあったことは言うまでもない。これに続いて、11 月 26 日南方占領地域の軍政分担地域が、「占領地軍政実施に関する陸海軍中央協定」によって定められ、蘭領インドネシアを二つに分割して、陸海軍でわけられた（陸軍担当地域は、香港・フィリピン・マレー・スマトラ・ジャワ・英領ボルネオ・ビルマであり、海軍には蘭領ボルネオ・セレベス・モルッカ諸島・小スンダ列島・ニューギニア・ビスマルク諸島・グアム島）。軍政についての重要事項は、大本営政府連絡会議や閣議で決められ、陸海軍からそれぞれの現地軍に指示された。各占領地の軍司令部内に軍政部がおかれるという体制をとった。

先述のように、南方攻略作戦が一段落したことにより、1942 年 6 月 29 日、大本営は南方軍に「南方要域ノ安定確保」という基本任務を付与した。これに伴い、軍政機構の改編が行われた。1942 年 6 月 27 日（軍令陸甲第 46 号）南方軍総司令部及び第 14、第 15、第 16、第 25 軍司令部の編成改正が令され、各軍司令部内の軍政部等にかわって、南方軍総司令部に軍政総監部が、各軍に軍政監部がそれぞれ設立されるようになった。

南方軍総司令官が南方軍政を統監するための事務管掌機関として総司令部に設置された軍政総監部では、南方軍総参謀長が軍政総監を兼任し、総参謀副長が総務部長を兼任した。各軍司令部に設けられた軍政監部では、軍参謀長が軍政監を兼ね、軍政監部総務部長及び部員中若干名が軍参謀を兼任した。たとえば、第 25 軍は、1942 年 8 月、「第 25 軍軍政監部含む規定」を定め、各部には総務、管理、警務、司法、産業、財務、交通をおいた [南方方面陸軍作戦: 39-40]

<南方軍・各軍管轄地域による軍政の概要（1942 年末）>

	管轄地域	司令部（軍政監部）	概 要
第 25 軍	マレー・スマトラ	シンガポール	マレー：特別市（昭南市）1、州 10 スマトラ：10 州（リオ群島は昭南市） →スマトラでは当初は要地に軍政支部を設けたが、マレー同様に各州に州長官任命
第 16 軍	ジャワ	ジャカルタ	特別市（ジャカルタ）1、候地 1、州 17 →州意かは現地住民を採用
ボルネオ守備軍	旧英領ボルネオ	クチン	軍政監部ではなく、軍政部を設け、参謀長が兼任。 5 州にわけ、州長官
第 15 軍	ビルマ		当初：参謀部内に行政班や軍司令部に軍政部→軍政監部。42 年 8 月 1 日軍司令官指揮下にビルマ行政府（バー・モウ長官）設置。他略
第 14 軍	フィリピン		42 年 1 月 23 日比島行政府設置。軍による直接行政と間接行政。当初：軍司令部に軍政部→軍政監部。比島全域を 5 地域に軍

1942 年 9 月 17 日、南方軍に対し、第 38 師団（当時、主力は第 25 軍指揮下でスマトラに、東方支隊等は第 16 軍隷下チモール？）を第 17 軍戦闘序列に編入し、南方方面へ転用するという命令が出された（大陸命第 488 号）。[同前：49]

■林氏によれば、当初慰安所の開設・管理、慰安婦の募集をしていたのは兵站であったが、上記のように軍政機構の改組があった 1942 年 7 月頃の時期に、慰安所の管理も軍政機関に移行されたのではないかと推測している [林博史 1993b：75]

■軍政期 1943 年 11 月にだされたマレー軍政監慰安所関係の公文書 [林博史 1993b：73-]

←林氏発見。[吉見 1992] には所収していないので、林論文参照。

<公文書>馬來軍政監「慰安施設及旅館営業取締規程」（馬來監達第 28 号、1943 年 11 月 11 日）、「慰安施設及旅館営業遵守規則」、「別冊娼妓、酌婦雇用契約規則」（馬來監達第 29 号、1943 年 11 月 11 日）。←この時点での状況＝第 5 師団は婆羅洲に移動（42 年 12 月より）、第 25 軍もスマトラに移駐（43 年 5 月）、第 25 軍の移駐とともに第 25 軍軍政部もスマトラに移駐して、スマトラだけを管轄。シンガポールには馬來軍政監部が設置され、マレー半島を統括。したがって、これらの慰安所規程は、シンガポール及びマレー半島に関するものである。

←（詳細は論文参照）。「慰安所の設置・運営、慰安婦の募集・就業条件など細部にわたって軍政監・地方長官などの軍政組織が管理していたことが明確に示されている文書」[林 1993b：75]

←金さんがこの頃マレー半島にいたとすれば、該当することになるので、調査必要。

■また、馬來軍政監部『戦時月報（軍政関係）』1943 年 7 月 31 日附、8 月 31 日附、9 月 30 日附、10 月 31 日附、11 月 30 日附に、慰安所への「衛生サック」の配給状況の記載→『軍政月報』と改称、同 1944 年 2 月 29 日附にも同様の記載。（詳細論文参照）。

→1943 年 7 月～11 月分、1944 年 2 月分の 6 ヶ月間で計 17 万 5500 個、のべ 182 日なので 1 日当たり 964 個の計算（43 年分の配給先は 6 州 2 企業）。1944 年 2 月分（慰安婦数に応じて各州市に配給された）から計算すると、一日当たり 2500 個＝「マレー軍政監部管轄下の慰安所での使用数の目安」[林 1993b：76]

■<公文書>＝野戦高射砲第 45 大隊第一中隊『陣中日誌』1942 年 5 月 1-20 日 [吉見 1992：361-362] 1942 年当時、ジャワ島スラバヤに朝鮮人慰安婦の記載？

⑦???

<課題>金さんへの再調査必要—1942.7～1944.3 までのマレー、スマトラ、ジャワの状況

⑧新南方軍総司令部と第七方面軍創設

南方軍総司令部がシンガポールからマニラに移転することに伴い、そのあと新たに第七方面軍が設置された（移転は 5 月？）→1944 年 3 月 27 日、大本営は、新たに第 7 方面軍の戦闘序列を令するとともに、南方軍戦闘序列を更新した（大陸命第 977 号）。[同上：184] ←地図 [同：191]。

南方軍—

第 2 方面軍

第 2 軍

第 18 軍

第 19 軍

第 7 方面軍；土肥原賢二大将

第 16 軍

第 25 軍

第 29 軍

ボルネオ守備軍

緬甸方面軍

第 15 軍

第 28 軍

第 14 軍

印度支那駐屯軍

泰国駐屯軍

第三航空隊

第四航空軍

南方軍直屬部隊

これに伴い、同年 3 月 22 日南方軍幕僚の新人事が発令された。新しい南方軍総司令部は他からの転入者が主となって構成され、第七方面軍司令部は従前の南方軍総司令部の人員が中心となって構成された。特に主な幕僚は南方軍参謀が充当された。附属機関として第七方面軍軍政監部（1945 年 1 月 22 日、軍政総監部に改称）が編成されたが、その人員も南方軍軍政総監部の陣容そのままだった。したがって、「南方軍は、後方及び軍政に関しては大綱を握り、その実施面は第七方面軍が担当することとなった」[同：201] 参謀長＝清水規矩中将（軍政監を兼任）、参謀副長＝磯村武虎少将（軍政監部総務部長兼任）[同：202] また、南方軍総司令部は、1944 年 5 月にシンガポールからマニラに移転したが、船舶輸送業務の中核はシンガポールのままであった。

<第七方面軍・戦闘序列（1944.7）及び兵力配置（1944.4.15）[同：205-206] 等>＝地図

第 7 方面軍；軍司令官＝土肥原賢二大将

第七方面司令部（司令部：シンガポール）

第 16 軍；原田熊吉中将 ジャワ方面

第 16 軍司令部（司令部：ジャカルタ）

独混 27 旅団：西ジャワ

独混 28 旅団：東ジャワ

第 25 軍；軍司令官＝田辺盛武中将 スマトラ方面

第 25 軍司令部（司令部：プキチンギ）

近衛第二師団：北スマトラ

第 4 師団：中スマトラ

独混 25 旅団：北西スマトラ

独混 26 旅団：南スマトラ

第 29 軍；軍司令官＝石黒貞蔵中将 マレー方面

第 29 軍司令部（司令部：タイピン）

独混 35 旅団：アンダマン島

独混 36 旅団：カーニコバル島

独混 37 旅団：ナンコーリ地区

第 12 独立守備隊：マレー地区

第 18 独立守備隊：シンガポール地区

ボルネオ守備軍；軍司令官＝山脇正隆 ボルネオ方面

ボルネオ守備軍司令部（司令部：クチン）

独立守備歩兵第 40・41 大隊

直轄部隊 1. 教育関係

南方軍幹部候補生隊 ジャワのスマラン

南方軍下士官候補生隊 マレー・ポートディクソン

南方軍教育隊 スマトラのシボロンボロン

南方軍憲兵教習隊 マレーのクアラランブール

南方軍経理教育隊 シンガポール

2. 補給関係 (→44年5月6日改称)

南方軍野戦兵器廠→第七方面軍野戦兵器廠

南方軍野戦自動車廠→第七方面軍野戦自動車廠

南方軍野戦貨物廠→第七方面軍野戦貨物廠

←本廠をシンガポール、支廠をバレンバン、クワラルンプール
サイゴン、バンコク、主張所をクチン等に設置

(第七方面軍管内だけでなく、南方軍全域の所要補給も担当)

3. 製造関係

1) 南方燃料廠

ビルマ燃料工廠 エナムジョン、シリアム

北スマトラ燃料工廠 バンカラランブランダン

中スマトラ燃料工廠 バカンバル

南スマトラ燃料工廠 バレンバン

ジャワ燃料工廠 スラバヤ

ボルネオ燃料工廠 ミリー

ブルネイ燃料工廠 ブルネイ

南方燃料技術研究所

2) 南方軍野戦造兵廠 (兵器関係の製造・修理等)

本廠=バンドン シンガポールに昭南工廠

4. 衛生関係

南方第一陸軍病院 (シンガポール)

南方第三陸軍病院 (ジョホールバル)

第12兵站病馬廠 (シンガポール)

第18軍馬防疫廠 (シンガポール)

南方軍は、1944年4月12日、各兵団の任務を命令した。第七方面軍に対しては「アンダマン、ニコバル諸島、マレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオ」の安定確保、特に「重要資源要域への防衛態勢」の強化がその任務とされた。さらに、1944年5月に南方軍軍司令官はシンガポールで会合し、「南方軍作戦指導大綱」が開示された。このなかで、マレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオを包括する地域を「国防重要資源中核地帯」及び「南方全域二於ケル總兵站基地」と位置づけ、「精油地帯特ニ『バレンバン』ノ防衛ハ絶対トス」とされた。

金さんは敗戦までの間に、「インドネシア、マレーシア、ジャワ」等の慰安所に行かされたと証言しているが、第七方面軍の管轄地域と符号している。

■以下、〈第七方面軍参謀・今村豊『第七方面軍復員史』防衛庁図書館蔵。=シンガポール・ジョホール州を中心とした終戦記録〉

▲1945年以降、方面軍は戦況悪化に基づき、防衛作戦の重点を従来のアンダマン・ニコバル諸島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ領域の確保から、マレー頭部及びシンガポール周辺地域に変更。

▲1945年5月頃、連合軍のシンガポール奪回の反攻がせまりつつある状況下で、方面軍は昭南周辺地区を強化した。

▲敗戦直前、ボルネオに連合軍が上陸、第37軍が交戦したが、ボルネオ以外は連合軍の本格的攻撃を受けていなかったが、方面軍は、英軍を主力とする連合軍の反撃が強まるなか、シンガポール奪回を9月頃と判断し、「為し得る限りの兵力を昭南周辺地区に集結し、特に濠北方面より第5、第48師団等の転用を実施し、一方北より第37師団が泰より馬來半島を南下しつつあった。第三航空軍及び第10方面艦隊を指揮することによって昭南を中核とする防衛整備は一段と強化」される状況にあり、「全軍総特攻の精神」でシンガポールを死守する体制を準備している最中に、敗戦をむかえた。

■[林1993b]によれば、戦争末期「ビルマは地獄、昭南(シンガポール)は天国」「ソロモン一線、東京二線、昭南島は第五線」、シンガポールには、敗戦直前にも軍慰安所があった。

2) 加害軍隊について判明している事実

①広東攻略作戦(1938・～)

:1938年9月19日第21軍を編成、海軍第七艦隊と協力し、広東付近要地の攻略を開始→10月21日広東を占領。

■広東作戦部隊:第21軍 軍司令官:古荘幹郎中将

軍司令部

第5師団:安藤利彦中将(38.5.25-11.9)→今村均(38.11.9-40.3.9)

→中村明人(40.3.9-10.15)→松井太久郎(40.10.15-42.5.11)

第18師団:久納誠一中将(38.7.15-40.2.10)→百武春吉(40.2.10-41.6.10)→牟田口廉也(41.6.10-43.3.18)

第104師団:三宅俊雄中将(38.6.25-11.17)→浜本喜三郎(38.11.17-40.12.2)→蒔田康一(40.12.2-42.8.1)

軍直轄部隊:独立機関銃大隊3、独立軽装甲車中隊3、山砲兵連隊2、野戦重砲兵旅団1、迫撃大隊2、白砲大隊2、野戦高射砲隊8、気球中隊1、その他

第4飛行団:略

<第5・18・38師団の変遷>

◆第5師団:鯉(こい) 明21.5.14 広島 セラム島 歩11.21.42
中国→マレー→臺北

1937年7月第5師管区で動員完結、その後中国各地を転戦や40年9月北部仏印進駐。陸路北部仏印を通過し、海防より乗船して上海地区へ

*第5師団の一部(国崎支隊=国崎登少将-歩兵第9旅団-歩兵第41連隊

=山田鐵次郎大佐)は南京攻略戦の参加部隊として中国人虐殺[笠原1997:80-81、224-225]

1940年10月12日大陸命により(第22軍戦闘序列→)大本营直属、上海付近に兵力を集結して、上陸作戦の訓練。41年4月上旬「呂号演習」

開始、師団は本演習の骨幹師団として参加(中略)10月24日上海北側地区に全師団の集結完了。11月15日第25軍戦闘序列に編入。

*[林1992:226-231]によれば、1888年広島鎮台を改変して編成された師団。本部は広島。広島・福山・浜田・山口の歩兵連隊を主力に構成。日清戦争・義和団事件・日露戦争・シベリア出兵など日本による主な戦争・海外出兵にすべて参加。1937年芦盧溝橋事件勃発すると華北に派遣され、40年末まで長城戦-太原攻略戦(山西省)- (国崎支隊は南京攻略戦)-青島攻略

戦-徐州会戦-広東攻略戦-山東省警備・治安戦-ノモンハン転進(途中停戦で参加せず)-

南寧作戦-北部仏印進駐。「中国の北から南、北ベトナムまで激戦地に投入」攻略戦の合間をにって占領地の警備にあたり、掃討戦・治安矯正作戦。南京戦に参加した国崎支隊(第41連隊)=中国女性への強姦の証言。

1940年末から上海付近の警備にあたり、南方作戦のための準備→マレー作戦へ。

*「中国戦線の経験はマレー作戦以降にももちこまれた」[林:231]→マレー半島の大部分の肅正を担当。中心部隊の歩兵第11連隊は「勇猛果敢その名を国の内外にとどろかせ」[歩11会名簿-林:227]

◆第18師団:菊 1937.9.9 久留米 南ビルマ 歩55.56.114
中国→マレー→ビルマ

*37.11.5 杭州湾に上陸→12月まで第10軍として南京攻略戦に参加(南京にはむかわず杭州へ)

1938年1月以降杭州付近警備、6月29日上海に移動→

その後同地付近の警備→23軍隷下の広東付近の警備→40年末ごろから

南方作戦準備のための主として上陸訓練。41年11月6日の大陸命により、

11月15日以降第25軍戦闘序列へ→マレー作戦へ[マレー進攻作戦:431]

*マレー作戦で最初にコタバル上陸をはたしたのが師団傘下の佐美支隊(第56連隊基幹)、主力は1942年1月22日にシンガラに上陸。ジョホール州での肅正を担当→四月初にビルマへ(ビルマで敗戦)。

*＜証言＞第18師団の従軍した新聞カメラマン石井周治証言「第18師団は戦争の強いことでも折り紙つきだったが、荒っぽいことでも有名でネ。部隊の通った後をいくと、道路の真ん中に女が大の字になって死んでいるんですよ。開いたマタのあそこに、トウキビが一本突き刺してあるなんてのはザラですね。(中略)乾いた田の稲の間にタコツボみたいな穴を掘って女がかくれているんですな。兵隊はそれを知っているから、女を捜し出しては犯ったあと、パン！と一発です。ウン、殺しちゃうんです。」(森山康平ほか『証言記録 大東軍共栄圏』[林1992:232]より再引用)

*＜証言＞陸軍報道班員としてマラヤにおくられた寺崎浩の「南支からの歴戦の兵隊郎」に対する証言「・・・この部隊は強盗、強姦、掠奪、放火など一通りやってきた人間ばかり。・・・人間のやり得る悪という悪はすべてやったという部隊」(『戦争の横顔』[林同上:232]より再引用)→林氏は「第18師団第五連隊が主力の木庭支隊」と推測している。

＜証言＞報道班員としてマラヤに行った中島健蔵も同様の証言＝鈴木友吉大佐(輸送指揮官)より「討伐のためには家を焼き、機密保持のためには非戦闘員を殺し、部下の不満から発する専断(ママ)、凌辱などの行為に目をつぶらなければならないのが実情」(『回想の文学⑤』[林:233])

◆第38師団:昭 昭14.6.30 名古屋 ラバウル 歩228.229.混成3

南支→香港→ガ島

*第38師団:藤井洋治中将(39.10.2-41.9.1)→佐野忠義(41.6.20-

48.6.10)→影佐禎昭(43.6.10-○)

*[香港・長沙作戦:70-71]1939年8月~11月、名古屋師管区で臨時編成。歩兵228(名古屋)、229(豊橋)、230(静岡)??。1939年10月2日第21軍戦闘序列下へ(大阪港→広東へ)。その後、広東付近にあっては、中山攻略戦(1940年3月)、良口作戦(1940年5月~6月)、東江作戦(1941年4月~5月)等に従事し、以後は対敵封鎖を命じられ、約230軒(=キロメートル)に及ぶ遮断線を構成。(1941年5月一部改編)。第23軍へ。その後1941年12月8日に開始された香港作戦の主力となって香港を占領、その直後に第16軍戦闘序列下に入り、蘭印作戦へ。

■1939年末支那派遣軍の編成

支那派遣軍(39.9.23~) 総司令官:西尾寿造大将・総参謀長:板垣征四郎

北支那方面軍(第1軍、12軍、駐蒙軍、直轄)

第11軍

第13軍

第21軍(安藤利吉中将)→

第5、18、38、104師団

台湾混成、近衛混成旅団

■1940年2月9日、大本営は賓陽会戦のさなかの第21軍の戦闘序列をとぎ、新たに南支那方面軍(司令官:安藤利吉中将40.2.10-10.5)及び第22軍の戦闘序列を令し、支那派遣軍の戦闘序列に編入した。第22軍は司令官久納誠一(40.2.10-40.11.19)中將のもと、第18・38・104・106師団、第21独立飛行隊により編成された。(40年9月第5師団は仏印へ「進駐」)。

■第23軍、前記参照。

2) 香港攻略作戦(41.12.8~)

支那派遣軍(総司令官:畑俊六対象)下の第23軍(司令官:酒井隆(41.11.6-43.3.1))の第38師団(佐野忠義中将)をもって、香港への侵略。マレー上陸を確認後に開始→12月25日に香港占領。

■＜陸軍＞

第23軍(司令官:酒井隆中将)

佐野兵団(長:第38師団長、佐野忠義中将)

第38師団

独立速射砲第2・5大隊

独立山砲兵第10連隊、同第20大隊

迫撃第21大隊 基幹

北島部隊(長:第1砲兵隊長、北島中将)

第1砲兵隊、ほか略

荒木支隊

歩兵第66連隊

軍飛行隊

飛行第45戦隊

＜海軍＞ 略

→41.12.25 香港占領

第38師団:香港「攻略」後42年1月14日以降第16軍隷下へ

3) マレー作戦(41.12.8~)

■南方軍総司令官:寺内寿一大将

第25軍(司令官:山下奉文中将)

近衛師団(タイ国進駐時には一時第15軍に配属)

第5師団(12月8日、主力でシンガラ・パタニーに敵前上陸)

第18師団(師団長:牟田口廉也)

当初はタク美支隊のみがコタバル上陸、師団主力は1月

23日シンガラに上陸)

ほか略

シンガポール作戦=42.2.15 占領→華僑虐殺

同上

2月21日、第25軍による軍命令=治安肅正と指揮下の各師団の地域分担

①シンガポール警備隊(隊長:第5師団の川村参郎少将)シンガポール市の警備

②近衛師団(西村琢磨中将)は市内を除くシンガポール島の治安任務

③第18師団(牟田口廉也中将)はジョホール州に移動、同州の治安警備

④第5師団はジョホール州を除くマレー半島

[マレー進攻作戦:631][林1992:59]

＜マレー作戦終了後の行動＞[同上:643-644]

近衛師団:中・北部スマトラ攻略作戦のため3月8日シンガポール発→12日メダン北方地区に上陸→迅速にアチエ州の要塞およびサバン島攻略や3/17中部スマトラのパダン攻略を最後に中・北部スマトラ作戦を終了。事後師団主力はながく同島に留まって治安の確保に任じた。

第18師団:ビルマ攻略戦に参加するため、4月2日シンガポール発、海路ラングーンに前進し、8日同地に上陸、ビルマで戦闘。

第5師団:しばらくマレー半島の治安警備。「種々の経緯」→豪北方面に転用、ながく同方面の作戦。

5) 蘭印攻略作戦

■＜陸軍＞

南方軍総司令官：寺内寿一大 将

第16軍 (司令官：今村均中将)

第2師団 (第2戦車連隊等配備)：西部ジャワ攻略

第38師団 (香港「攻略」後42.1.14以降第16軍隷下へ)

師団主力 (4コ大隊基幹)：南部スマトラ攻略

東方支隊 (3コ大隊基幹)：アンボン・チモール攻略

東海林支隊 (2コ大隊基幹)：西部ジャワ (エレタン)

第48師団 (マニラ攻略後42.1.14以降第16軍隷下へ)

師団主力 (第4戦車連隊配備)：東部ジャワ攻略

金村支隊 (1コ大隊)：バリ島攻略

川口支隊 (指揮官：川口清健少将、3コ大隊基幹)

：英領北ボルネオへレド攻略

*北部スマトラは、第25軍がマレー作戦終了後「攻略」

第3飛行集団 (長：菅原道大中将)

第3飛行団、第7飛行団、第12飛行団基幹

：マレー作戦後、蘭印・北部スマトラ攻略に協力

第一挺進団が指揮下にはいり、パレンバンに空挺降下

<海軍>略

3. 敗戦時の状況

■敗戦時シンガポール＝第7方面軍

第29軍 (マライ)、第25軍 (スマトラ)、第16軍 (ジャワ)、第30軍 (ボルネオ)、第三航空隊 (昭南)、第10方面軍艦隊 (昭南)、その他直轄部隊

■第七方面軍の司令部

1944.3.27? 大陸命第977号→第七方面軍創設、南方軍指揮下

司令官：44.3.22 土肥原賢三大将

参謀長：44.3.22 清水規矩中将→44.6.27 綾部橋樹中将

参謀副長：44.3.22 磯村武虎

1945.4.7-8.15

司令官：45.4.7 板垣征四郎大将→○

参謀長：綾部橋樹中将→○

参謀副長：44.3.22 磯村武虎少将→45.7.5 志村文雄少将→○

■敗戦後の状況 (今岡豊前掲書より)

1945年8月15日 各部隊毎に「玉音放送」→ほとんど聞き取れず。敗戦降伏に各部隊「混乱動揺」とくに、「臺北より転用中の第5師団 (すでに一部は昭南に到着)」。

8月18日に戦闘行動停止命令。克服指揮までの方面軍の処理は「昭南ジョホール地区の部隊と対英折衝で手一杯」「マライ、スマトラ、ジャワ等に対する統帥は殆ど中断」「昭南ジョホール地区の部隊の掌握すら一時は不可能」

8月27日 南方軍総参謀長 沼田中将 ラングーンで連合軍との間で、南方軍降伏に関する基本肯定

9月4日 方面軍司令官板垣大将及び福留中将 (第10方面艦隊司令長官)、英軍サセックス藩にてm

日本軍の武装解除に関する命令に調印。昭南部隊のジョホール州移転命令。

9月5日 英軍シンガポールに上陸。

■その間の日本軍の集結地区

ジョロン：邦人め含め日本軍隊の主力

チャンギー地区：航空軍の一部

セレーター軍港地区：海軍

■「病院は陸軍病院として、従来使用していた建物を英軍に譲り、大和分院に移る」

→「9月1日現在患者3040名、最大収容能力3400名、看護婦560名 (内一般邦人女子を

臨時看護婦として300名)であった」の記述。

※金さんは、敗戦後、軍人によって慰安所から、陸軍第10病院で臨時看護婦をさせられたと証言。

(中略)

9月12日 南方軍降伏式がシンガポール市庁舎で行われる。病欠の寺内総司令官に代わり、代理として板垣方面軍司令官が、正式文書に調印。

*日本への帰還。1920年11月22日内環第1船 (邦人主) →22年10月まで戦犯のぞき帰還。

■朝鮮人・台湾人の状況

▲馬來俘虜收容所『昭和20.12.1 朝鮮出身雇用人連名簿』防衛庁図書館。米政府より返還文書←朝鮮人軍属の転入表 (1942年9月8日以降4回1058名の転入、事故 (移動) 353名) 及び人名簿があるので、ヒョンブの創氏改名の名前がわかれば、名簿に出ている可能性。

▲『昭和21.12.31 シンガポール通過部隊履歴書』同上。

朝鮮人軍属の詳しい履歴書 (本籍・現住所・徴集年・名前・生年月日・軍属歴等)

←ヒョンブの名前がでる可能性。

▲今村前掲書によれば、

「朝鮮人は終戦と共に、日本軍の統制に服するのを嫌い、自ら連合軍と称して進んで連合軍の統制下に入らんことを希望」←英軍は「朝鮮人をチャンギーの一角に移して朝鮮人キャンプを設け英軍より衛兵を出して日本軍に対する以上厳重な監視下におかれた」

「キャンプに収容された朝鮮人台湾人の数は次の通りであった。

朝鮮人 1176人

台湾人 1266人 (昭和21年6月30日現在)」

←※金さんがヒョンブとともにいったのは米軍収容所と主張。

<参考文献>

吉見義明編集・解説 1992 『従軍慰安婦資料集』大月書店

林博史 1992 『華僑虐殺—日本軍支配下のマレー半島』すずさわ書店

— 1993a 「マレー半島の日本軍慰安所」『世界』1993年3月号

— 1993b 「マレー半島における日本軍慰安所について」『関東学院大学経済学部一般教育論集 自然・人間・社会』第15号

— 1994 「シンガポールの日本軍慰安所」『戦争責任研究』第4号。

吉見義明・林博史 1995 『共同研究 日本軍慰安婦』大月書店

西野瑞美子 1993 『従軍慰安婦と15年戦争—ビルマ慰安所経営者の証言』明石書房

総山孝雄『南海のあけぼの』叢文社、1983年

土金富之助『シンガポールへの道』

←上記2冊の「慰安婦」関連部分は、石出法太・金富子・林博史『「日本軍慰安婦」をどう教えるか』梨の木舎に所収。

防衛庁防衛研修所戦史室『支那事变陸軍作戦<3>』『香港・長沙作戦』『マレー進攻作戦』『蘭印攻略作戦』『南西方面陸軍作戦—マレー・蘭印の防衛—』等